

### ■ CSV戦略② 生物多様性の保全

特定の背景、目指す姿、活動方針、リスクマネジメント

これまでの取り組み・評価

実践報告

生態系ネットワークの復活

フェアウッド調達

木材調達ガイドラインの運用と改定

環境NGOとの協働

国産材の活用

「5本の樹」計画

「5本の樹」計画とは

生物多様性活動に関する民間団体への参画

緑豊かな賃貸住宅「シャーマゾン ガーデنز」

分譲マンションにおける緑化の推進

「5本の樹」いきもの調査

「庭木セレクトブック」と「5本の樹・野鳥ケータイ図鑑」

「緑の都市賞」を受賞した「新・里山」・「希望の壁」

## 生物多様性の保全

自然の循環と生態系を守りながら、  
豊かで心地よい暮らしを実現できる社会へ



### 特定の背景、目指す姿、活動方針、リスクマネジメント

#### 背景

マテリアル(重要)な側面評価は、現状分析にとどまらずステークホルダーへの波及効果を重視して決定

生物多様性については、特定のサイトで希少生物種の保護に取り組む活動が目立つことも少なくありません。しかし、企業が本気で社会的課題解決を志すならば、企業が本業を通じて生物多様性の保全に取り組む際には、その影響力を最大化することが重要だと考えています。この観点から当社の事業活動の分析を行うと、取り組みの背景として次の2点が浮かび上がってきます。

#### わが国最大規模の造園会社としての影響

日本で最も多くの住宅を供給してきた積水ハウスは、庭や街路の植栽活動を通じた植栽本数は年間約100万本を超えることもあります。1社で東京都内にある街路樹の本数を上回る数を毎年植栽しています。売上金額も含めて日本最大規模の造園業者でもあるため、樹種の選び方が樹木生産市場のトレンドを変えるほどの影響力を持ちます。

一般的に外観の良さや管理の容易さから園芸種や外来種が偏重されることも少なくありませんでした。しかし、これらの植物は地域の鳥や昆虫などにとって有用なものばかりでないため、地域の生態系に配慮した樹種選定が求められます。

#### 広範なサプライチェーンへの影響

1棟の住宅に使われる部材は数万点に及びます。こうした建材供給を担う多数の設備メーカーを裾野に抱える住宅業界のリーディングカンパニーとして、当社の「サプライチェーン・マネジメント」は選定を通じて、より川上のメーカー・商社や生産地にまで影響を及ぼします。

特に、建築を支える重要な生物由来原料である木材では年間30万㎡以上を使用しており、そのトレーサビリティや流通経路の複雑さに鑑みれば、最も配慮の必要な素材だと認識しています。

#### 目指す姿

生態系保全を社会価値・住まい手価値として具現化して提供することで、時代をけん引し、差異化する企業へ

木材調達ガイドラインの運用に対する「日本環境経営大賞」の最上位賞※1、「生物多様性日本アワード」優秀賞※2、「5本の樹」計画をベースとした本社の緑化空間が「みどりの都市賞」で内閣総理大臣賞を受賞※3するなど、当社の取り組みは高い評価をいただけてきました。ただ、受賞自体よりもそれらの活動がサプライヤーを通じて一つのトレンドとして社会に定着・普及する契機となり、先行して差異化し、お客様に豊かで心地よい暮らしを提供することを目指します。

※1 第8回 日本環境経営大賞「環境価値創造パール大賞」(同賞表彰委員会、三重県 主催)

※2 第1回 生物多様性 日本アワード「優秀賞」(環境省、(財)イオン環境財団 主催)

※3 第34回 緑の都市賞「内閣総理大臣賞」(公益財団法人 都市緑化機構 主催)

## 「グリーンインフラ」としての住宅の役割を創出

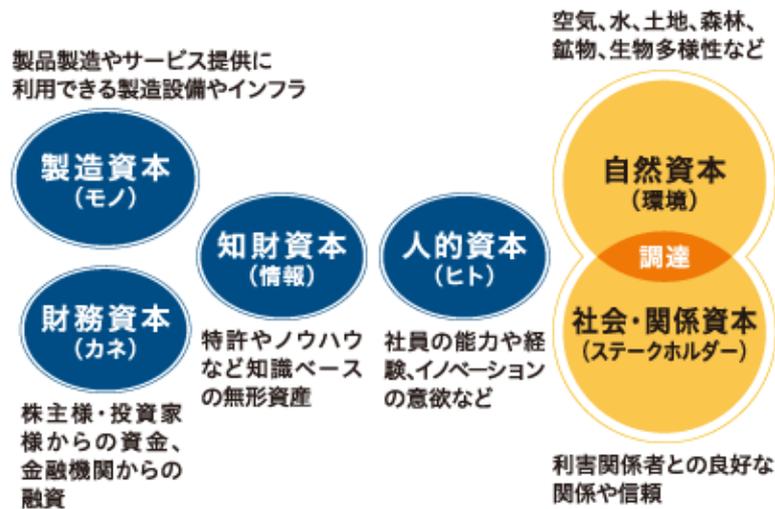
近年、生態系の持つ多様なサービスや多面的な機能を利用して災害リスクや自然環境の劣化、地域活性化などの社会課題を解決する基盤として見直す「グリーンインフラストラクチャー(グリーンインフラ)」という考え方が注目を集めています。

住宅とそれを取り巻く緑化は、家族の生命や幸せを守る重要なシェルターですが、それにとどまらず、都市のインフラととらえ、社会を変える大きな可能性を持つものとして見直すことで、生態系の価値が広く社会に実感されると考えています。

## 調達を「自然資本」の戦略的活用と位置付け

生物資源に対する依存度の高さを直視し、サプライヤーを巻き込んだ長期的シナリオで事業に組み込みます。

## 企業価値創造要素と「調達」の位置付け



## 活動方針

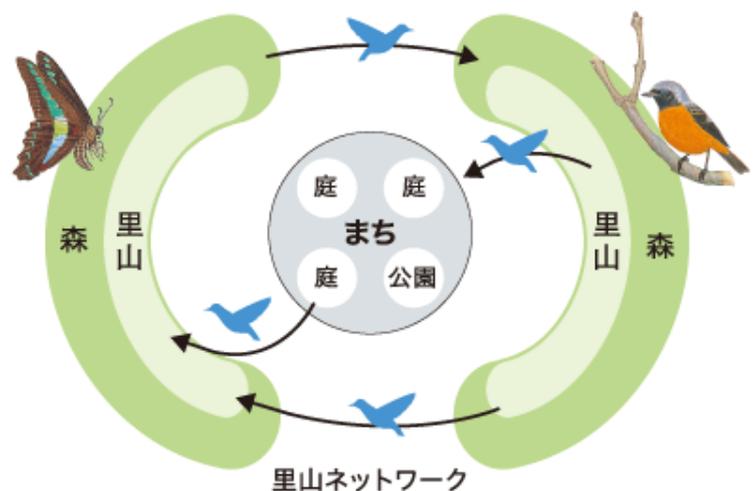
事業プロセスを通じた負荷の定量的な把握をベースに、サプライヤーと連携して進捗管理

サプライヤーへのプロセスマネジメントを通じて信頼関係を高め、より上流の生物由来原料についてのトレーサビリティに対する捕捉精度を高め、間接的な寄与を強めていくことを重視しています。

## 「5本の樹」計画 ～生態系に配慮した樹種の推進～

積水ハウスグループでは、造園緑化の植物について、園芸品種・外来種を多用するのではなく、「5本の樹」計画と名付けた生態系に配慮し、地域の生物にとって活用可能性の高い「在来種」の樹種を積極的に提案する造園緑化事業を2001年から推進してきました。

実施に際しては、地域の植木生産者・造園業者のネットワークと連携し、それまで市場での流通が少なかった在来種の樹種の生産を依頼。安定的な供給体制を確保するとともに、生活者に対して生き物と共生した暮らしの楽しさや意味を提案しています。



都心の庭や空間がつながることで生態系ネットワークが形成されます。

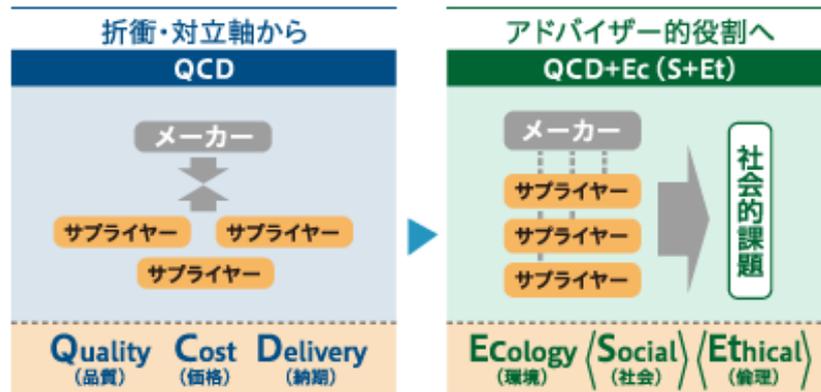
## 「フェアウッド」の利用促進

約60社の木質建材等サプライヤーに対して、毎年、調達実績調査を実施。各社が調達した木材の生産地、属性や合法性確認書類などを報告いただき、それをガイドラインに沿って数値化して進捗管理を行っています。

これにより、サプライヤー各社でも自社調達ルートへの関心が高まり、上流の商社等に対する啓発が進むことで、社会的に公正な木材「フェアウッド※」が広がります。

※ 伐採地の森林環境や地域社会に配慮した木材。

(財)地球・人間環境フォーラムと国際環境NGO FoE Japanが提唱しています。



企業調達においてメーカーがサプライヤーに対して一方的にQuality・Cost・Deliveryのみを求めるだけでは本物の協力関係は生まれません。

当社は、メーカーの役割は変化しなくてはならないという姿勢のもと、生物多様性をはじめとする社会的課題について、両者が認識を共有し、事業を通じて、その課題の解決に向かうことが重要だと考え、改善の取り組みを進めています。

## リスクマネジメント

自然資本や生態系サービス成熟の長い時間軸を前提に影響力を確保

### 「5本の樹」計画に関して

#### リスク 1

「5本の樹」計画コンセプト普及の下で、他社が同様の提案を行うことで当社の提案の価値が相対的に低下する恐れ

#### 対応 1

植木生産者ネットワークとの長年の連携を生かして市場ニーズに沿った樹種の提案を積極的に進めるとともに、設計の提案力アップ研修や施工体制の強化によって、より満足度の高いトータルなエクステリアデザインで差別化を図ります。

### 期待できる効果

当社が2012年から進めるブランドビジョン「SLOW & SMART」の下で、大開口サッシからの緑豊かな庭の景色を取り込んだ快適な暮らしを「スローリビング」と位置付けていること、緑化をその要素として積極的に発信することで、建物の差別化、居住価値のアップにも役立てられる。

### 木材調達に関して

#### リスク 2

国際的な木材取引の規制強化の流れの中で、伐採・輸出・流通が制約されて、自社で安定的に木材の調達ができなくなる恐れ

#### 対応 2

伐採地の規制動向等の最新情報は現地環境NGOが捕捉していることが多いため、国際環境NGOとのネットワークで把握し、情報を早期に木質建材サプライヤーと共有することで当社に対する優先的な木材の供給体制の見直しを準備してもらうことができます。

### 期待できる効果

EU木材規制、米国レーシー法等、木材のトレーサビリティが強化されても、他社に先行して各サプライヤーの状況まで把握しながら対応を進めておくことで、既存サプライヤーとの優先的な調達確保ができるとともに、新規採用の際のルール構築も容易となる。

## 生物多様性の保全

自然の循環と生態系を守りながら、  
豊かで心地よい暮らしを実現できる社会へ



## これまでの取り組み・評価

## 活動の実践・評価

## 1. 生態系に配慮した緑化「5本の樹」計画

## 実践

「5本の樹」計画に基づいて2001年の取り組み開始時からの植栽本数は2013年度に累積で1000万本を超えています。

2014年度は、戸建住宅の着工減の影響も響き年間81万本となりました。ただ、賃貸住宅の伸びに支えられ、外構や造成などが増えた結果、緑化植栽を含む当社の造園事業の売り上げは年間583億円となり、前年度を上回りました。

## ■ 年間植栽本数・累積植栽本数の推移



## 評価

戸建住宅の着工減少により植栽本数の減少傾向は避けられません。しかし、これまで緑化がイニシャルコストのアップや管理コストへのマイナスと受け止められがちであった集合住宅、賃貸住宅においても、快適性、経年美化や差異化への貢献が理解されて、植栽の増加や緑化提案の質の向上が進んでいるので、さらに価値提案に努めます。

## 2. 「木材調達ガイドライン」の運用

## 実践

2007年にハウスメーカーではいち早くガイドラインを定め、サプライヤー各社にこれに沿った運用をお願いするところからスタートしましたが、今では「伐採地不明」の調査回答もほぼなくなり、各社の意識の変化が実感されるようになってきました。ただ、実際には中国でのポプラの植林やオセアニア圏での大規模な植林、情報の少ない新たな地域からの材の提供など、簡単に判断できないケースも多く、専門家や環境NGOと密接に相談し、必要時には現地に出かけて判断しています。

## 「木材調達ガイドライン」10の指針(2012年度改定)

- ① 違法伐採の可能性が低い地域から産出された木材
- ② 貴重な生態系が形成されている地域以外から産出された木材
- ③ 地域の生態系を大きく破壊する、天然林の大伐採が行われている地域以外から産出された木材
- ④ 絶滅が危惧されている樹種以外の木材
- ⑤ 生産・加工・輸送工程におけるCO<sub>2</sub>排出削減に配慮した木材
- ⑥ 森林伐採に関する地域住民等との対立や不当な労働慣行を排除し、地域社会の安定に寄与する木材
- ⑦ 森林の回復速度を超えない計画的な伐採が行われている地域から産出された木材
- ⑧ 計画的な森林経営に取り組み生態系保全に寄与する国産木材
- ⑨ 自然生態系の保全や創出につながるような方法により植林された木材
- ⑩ 資源循環に貢献する木質建材

## 評価

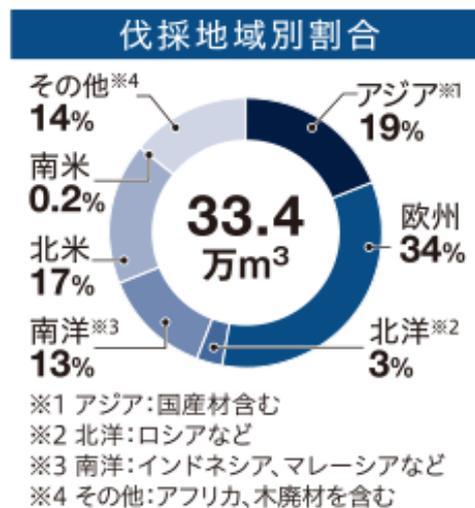
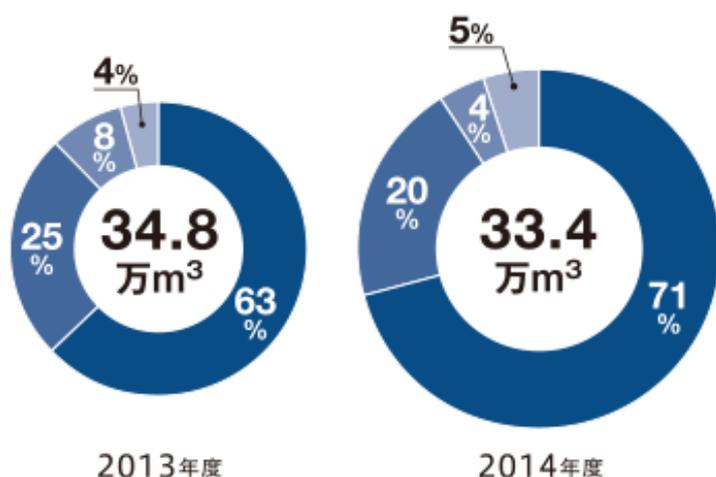
2014年度は、管理目標としてきた上位のS・Aランク木材の割合が初めて合計90%を上回り、特に最上位のSランク材は8ポイント増えて7割を超えました。

### 指針の合計点で調達ランクを決定

各調達指針の合計点で評価対象の木材調達レベルを高いものから順にS、A、B、Cの四つに分類。10の指針の中で特に重視している①と④に関しては、ボーダーラインを設定。

合計点(最大43点)	調達ランク
34点以上	.....S
26点以上、34点未満	.....A
17点以上、26点未満	.....B
17点未満	.....C

### 取り組みの推移



## 活動報告

### まちなみ評価制度「COMMON'S(コモンズ)」の制定・運用による生態系保全の推進

当社は2005年「まちづくり憲章」制定、2006年「まちなみ参観日」スタートと、常に、緑豊かで経年価値を高めていく独自のまちなみへの取り組み、全国に当社のブランド価値につながる良質なまちなみを一定量形成してきました。一方において、中小規模の分譲地や売建中心の分譲地においては、生態系の配慮やまちなみの景観形成においては改善余地のあるケースも散見されたため、2014年、全国の当社のまちなみを一定のレベル以上に守っていくために、「5本の樹」計画など客観的な評価基準を設けた、まちなみ評価制度「COMMON'S」を創設しました。2014年秋の「まちなみ参観日」で評価実施した42分譲地では、★3以上が80%以上を占めました。

#### ★3以上を達成基準とする、5段階評価

##### 評価項目

##### 「5本の樹」計画

- 5本の樹
- シンボルツリー
- 緑化率
- 緑視率

##### 建物・エクステリア計画

- 建物デザイン
- エクステリアデザイン
- 道路際の擁壁や土留め
- 道路際の床仕上げ
- 道路際の隣地境界仕上げ

★1~5の、  
5段階  
で評価

おおむね10区画  
以上の分譲地は  
★3以上を  
目指す。



事例:「コモンステージ敷戸」(大分市)コモンズ評価★5

## 主要指標の実績(KPI)

区分	指標	単位	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	定義
生物多様性の保全	年間植栽本数	万本	91	96	101	106	81	当社造園緑化における年間植栽本数
	「木材調達ガイドライン」 SおよびAランク 木材比率	%	87	85	89	88	91	当社による約60社の木質建材サプライヤーに対する実態調査

## ■ アドバイザー的役割を果たし質の高い「サプライチェーン・マネジメント」の維持努力を評価

「5本の樹」と「フェアウッド」の利用促進との二本柱での取り組みは、「利用」と「保全」とにバランスよく配慮した包括的な生物多様性保全活動です。特に既存の生物多様性を減少・劣化させないために重要な森林保全に寄与する「木材調達ガイドライン」の高いレベルでの運用努力は木材を調達し、利用する業界全体に影響を及ぼすに至っており、その目標に大きく貢献しています。

中でもアドバイザー的役割を担うことで質の高い「サプライチェーン・マネジメント」を実現している取り組みが特徴的で、その取り組みにおいては、さまざまな分野において普及している認証制度を質向上のための「ツールの一つ」と捉えていることです。そうした「ツール」活用によって目指す方向性も明確であり、また「ツール」を使いこなしているため、他者に対してもアドバイザー的な役割を果たすことができているのだと思います。

今後も本業における真摯でぶれないガイドラインの運用を継続していただくとともに、「真の持続可能性」を追求した一段上の取り組みを期待します。



国際環境NGO FoE Japan  
事務局長  
三柴 淳一氏

## フェアウッド調達

## 木材調達ガイドラインの運用と改定

2012年に「木材調達ガイドライン」を改定し、違法伐採の可能性や樹木の絶滅危惧リスク、伐採地からの距離、木廃材の循環利用、伐採地の社会面など多面的な視点で調達木材を評価。2014度の運用状況は、目標としたS・Aレベルの木材全体で、取り組み開始以降初めて90%を上回りました。

## フェアウッド調達（持続可能性、生物多様性に配慮した原材料調達）

私たちの暮らしや企業活動は、生物多様性の恵みに基づく資源や生態系のもたらすサービスに支えられて成り立っています。特に、大量の木質建材を利用する住宅メーカーとして、貴重な生物由来原料である木材については、持続可能性に配慮して計画伐採され、かつ、社会的にも公正な木材を原料として選択することが重要です。



一棟の住宅で使用される建材  
住宅一棟で使用される部材は数万点に及びます。

## 木材調達ガイドラインとは

海外において森林の違法伐採や過剰伐採が根絶されない一方、国内では木材自給率が上昇に転じたものの、まだ3割以下に過ぎず、伐採されずに放置されて山が荒廃するなどの問題があります。

当社は大量の木材を利用する住宅メーカーとして、これらの問題に取り組むため、合法性や生物多様性を軸に、伐採地住民の暮らしまでを視野に入れた「木材調達ガイドライン」を2007年4月に策定。これに基づき、「フェアウッド」※調達を推進し、調達レベルの向上を図っています。

「木材調達ガイドライン」は10の調達指針で構成され、違法伐採の可能性や樹木の絶滅危惧リスク、伐採地からの距離、木廃材の循環利用、伐採地の先住民にとっての伝統的・文化的アイデンティティ、伐採地の木材に関する紛争など、多面的な視点で調達木材を評価できるようになっています。当社のこのガイドラインは、単に生物多様性への配慮だけでなく、ISO26000の要請する各国の社会的課題への配慮の視点も含む内容として構成しています。

※ フェアウッド：伐採地の森林環境や地域社会に配慮した木材、木材製品のこと。  
財団法人地球・人間環境フォーラムと国際環境NGO FoE Japanが提唱

## 積水ハウス独自の「木材調達ガイドライン」の内容

## ■「木材調達ガイドライン」の10の指針（2012年度改訂版）

以下の木材を積極的に調達していきます。

1. 違法伐採の可能性が低い地域から産出された木材
2. 貴重な生態系が形成されている地域以外から産出された木材
3. 地域の生態系を大きく破壊する、天然林の大伐採が行われている地域以外から産出された木材
4. 絶滅が危惧されている樹種以外の木材
5. ★ 生産・加工・輸送工程におけるCO<sub>2</sub>排出削減に配慮した木材
6. ★ 森林伐採に関する地域住民等との対立や不当な労働慣行を排除し、地域社会の安定に寄与する木材
7. 森林の回復速度を超えない計画的な伐採が行われている地域から産出された木材

- 8. ★ 計画的な森林経営に取り組み生態系保全に寄与する国産木材
- 9. 自然生態系の保全や創出につながるような方法により植林された木材
- 10. ★ 資源循環に貢献する木質建材

★:2012年度に改訂した項目

(改訂の趣旨等、詳細は末尾の【参考資料】を参照下さい)



## ■ 調達レベルの評価 ～指針の合計点で調達ランクを決定

合計点(最大43点)	調達ランク
34点以上	S
26点以上、34点未満	A
17点以上、26点未満	B
17点未満	C

各調達指針の合計点で評価対象の木材調達レベルを高いものから順にS、A、B、Cの四つに分類。

10の指針の中で特に重視している1、4に関しては、ボーダーラインを設定。

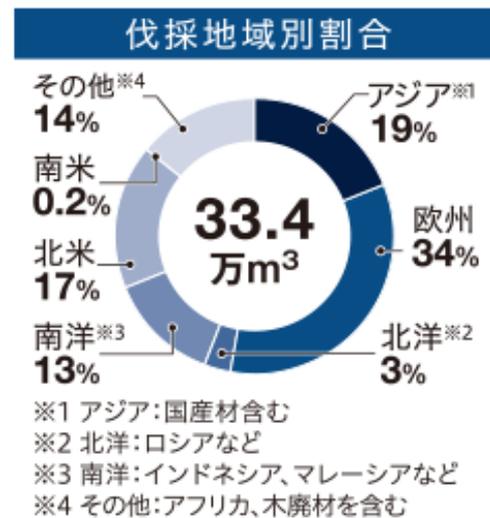
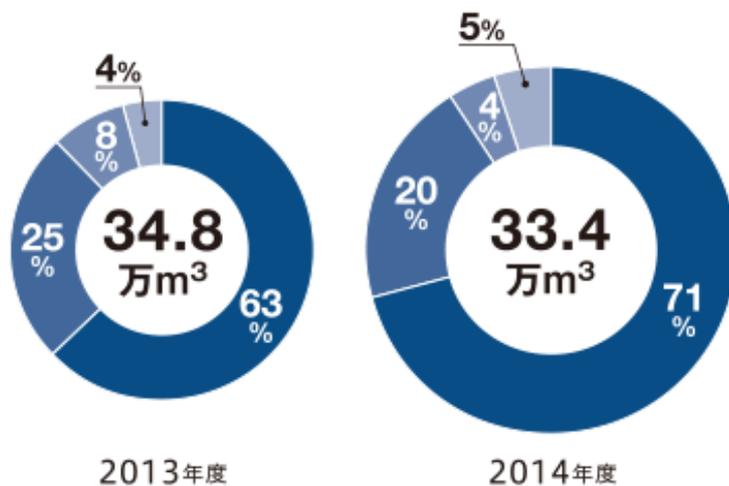
## ■ 2014年度の実績

2006年度に策定し2007年度から運用を開始した「木材調達ガイドライン」も6年目となり、多くのサプライヤーがこれを参考に、自社の調達状況の改善を図りはじめています。

2014年度は、目標としたS・Aレベルの木材調達比率95%には届かなかったものの、取り組みを開始して以来初の90%を上回る91.5%を達成しました。特に最高評価のSランク木材については71%と、前年比7ポイント以上アップしました。

今後もサプライヤー各社に対してよりキメの細かい改善提案を進めることで質の向上を図っていく予定です。

## ■ 取り組みの推移



■ 調達指針⑤ … 「生産・加工・輸送工程におけるCO<sub>2</sub>排出削減に配慮した木材」を調達します

乾燥工程の使用エネルギー

【趣旨】木材のライフサイクルCO<sub>2</sub>の中で、乾燥工程が占める割合は非常に大きいため、(調達指針⑤の)評価項目とします。

加点	乾燥時のバイオマス利用状況
2点	通常バイオマスの実を利用しているが、時期によっては補助的に重油を使用することもあるなど、乾燥熱源の過半数以上でバイオマスなど非化石燃料を使っている。
1点	乾燥熱源の過半数以上は化石燃料だが、過半数に届かないまでも、一定量のバイオマスを使用している。もしくは、バイオマスを活用する時期がある。
-1点	バイオマスを使うこともあるが、ごくわずかで、ほとんど使っていない。もしくは、バイオマスを使っていない。／乾燥時に使っている熱源が不明

■ 調達指針⑥ … 「森林伐採に関する地域住民等との対立や不当な労働慣行を排除し、地域社会の安定に寄与する木材」を調達します

木材調達における人権擁護や不当な労働慣行の廃止、伐採地の地域社会の安定などに関する取組み

【趣旨】木材調達のさまざまな段階で(調達指針⑥のような)社会秩序を乱すマイナス面が大きな課題としてありますが、一方で、労働者の人権擁護や不当な労働慣行を見直す動きも始まっています。また、代々受け継がれてきた森林と共生する林業や、小規模農業と組み合わせることで木が育つまでの収入を確保するアグロフォレストリー(混農林業)など、地域社会の安定を維持する取組みも広がってきています。

加点	乾燥時のバイオマス利用状況
1点	人権や労働慣行に関する企業方針や調達指針等、明文化された文書があり、取引先含め、共有されている。
1点	人権や労働慣行に関する訴訟や通報に対応できる仕組み(組織、システムなど)を構築しており、過去10年間に重大な訴訟や通報が無いことを確認できている。
1点	コミュニティ林業やアグロフォレストリーなど、伐採地住民の主体的な森林経営に貢献する木材調達を行っている。

## 環境NGOとの協働

「木材調達ガイドライン」の運用について国際環境NGO FoE Japanと継続的に交流を重ねており、世界標準の異なる価値観を認識して事業への反映可能性を検討する貴重な機会となっています。2014年度は、特に、東南アジアの新しい木材の動きについて緊密に情報交換を行いました。

当社がこの「木材調達ガイドライン」を策定するにあたって注意したのは、自社の独善的なガイドラインに流れないように客観性を確保しつつ、作成過程の透明性を担保することです。そのために、世界の木材の生産にかかわる最新の状況を把握しつつ、各サプライヤーの抱える現実的な課題を踏まえて、国際環境NGO FoE Japanとの検討を重ねてきました。

NGOとの協働は制定だけに留まらず、実際の運用段階における検証依頼や相談、そして本年度の改訂作業につながっています。例えば、2011年度においても、2010年11月1日にISO(国際標準化機構)による国際規格であるISO26000の発行を受けて、木材生産地における住民の生活安定など社会性への配慮についてNGOから最新の状況説明を受け、これに基づき何回もの協議を経てガイドラインへの現実的な反映の検討を重ね、2012年度にはガイドラインを改訂しました。さらに、改訂したガイドラインに基づいて木質建材のサプライヤーへの実態調査回答内容に関しても、新しい伐採地や樹種についての評価依頼などをはじめとする多くのアドバイスをもらいました。

当社からも、温暖化防止のために木材の乾燥工程における重油の利用等についてのサプライヤーの現状を説明し、バイオ利用の加点評価の可能性について世界の先進事例についての報告を受けて議論を行う等、極めて高い運用レベルへの反映にまで踏み込んで意見交換を行っています。

「資材調達」という経営の根本に関わる部分についても、こうした本音の意見交換ができるようになっており、企業にとっても世界標準の異なる価値観を認識して事業への反映可能性を検討する貴重な機会となっています。

近年は個々のサプライヤーから、自社においても木材調達のあり方についての改善を進めるに際しNGOを紹介してほしいという要請もあり、当社が築いたNGOとの信頼関係はサプライヤーにも波及し始めています。

また、2013年は、当社の直接のサプライヤーのみならず、異業種メーカーから木材調達の進め方についてアドバイスを求められるケースも増え、環境NGOとの付き合い方についてアドバイスを رفتり、直接NGOを御紹介したりといったケースもありました。

2014年度は、特に東南アジアの新しい木材の出荷の動きがあり、これに対して林野庁等へのヒアリングなどに加え、FoE Japanを通じて現地情報を得るなど、常に最新の情報についてアンテナを張るために有力なパートナーとして協働を進めました。

## 国産材の活用

2013年4月1日に開始された「木材利用ポイント制度」に対応するモデルとして、家の主要構造材である柱・梁に厳選された国産材を利用するシャーウッド「純国産プレミアムモデル」を新設し、展開を図りました。

国内の森林経営の健全化や、木材輸送に起因するCO排出量の削減を考慮し、当社は国産材を活用した合板の積極的な導入をはじめ、国産広葉樹の内装部材に活用するなど、活用の幅を広げてきました。

木材利用ポイント事業をきっかけとした、国産材活用に向けた林業全体の活性化の機運を受け、積水ハウスでは事業期間中に約500棟の純国産材プレミアムモデルを受注しました。これは、事業開始前と比べて約5倍の受注量となりました。使用いただいた樹種は地域ごとにバラエティに富んでおり、例えば、全体の約7割の受注をいただいた東北地方では、柱材として秋田杉を多く活用、中国・九州地方では美作檜を活用、というように「地産地消」を実現しました。

(申請受付は平成26年7月31日をもって終了)詳細は「[林野庁](#)」ホームページ をご参照ください。

2013年4月1日より開始された「木材利用ポイント制度※1」に対応するモデルとして、家の骨組みとなる柱・梁に厳選された国産材としたシャーウッド「純国産プレミアムモデル」を新設しました。柱については、単に国産材というだけでなく本物志向の銘木ブランド材を用い、また一般には採用の難しい梁についても国産2樹種から選択いただくことで、他ではできないプレミアムモデルを提案しています。



### ■ 純国産プレミアムモデルの仕様

部材	純国産プレミアムモデル(ポイント対応モデル)		
	スタンダード	アップグレード	ハイグレード
梁	カラマツ(新設)	カラマツ(新設)	ヒノキ
柱	スギ ■ 東日本(秋田スギ) ■ 西日本(吉野スギ)	ヒノキ (木曽、吉野、美作)	ヒノキ (木曽、吉野、美作)



【純国産プレミアムモデル カタログ より】

# 日本の木の家に、 住まう。

本建社が「シャウッド」は、より良い住まいのために、  
木にこだわり、世界中の木を厳選しています。  
現在では、主に北欧の木を使用していますが、  
日本の自然素材にこだわりをきたる方の  
思いにお応えするため、  
建造時に高品質な国産材を使用し、  
柱と梁の接合部をよりよき国産材とした  
「シャウッド純国産材プレミアムモデル」の  
提供をスタートしました。

風には、品質で強度の強い  
国産材やカラマツを使用。  
とりわけ柱は、お住まいの地域に合い、使われてきた  
地域ブランドを使用する木物を中心に、樹種は  
水青森、まむぎ、美作松、秋田杉、まむぎ杉。  
地域に合わせて選びます。  
地元の水で育てるシャウッド。  
愛着もひとしおです。

■主要構造部(柱・梁)に国産材を使用

	柱	梁
国産ハズレド	プランク	丸
国産アップグレード	プランク	カラマツ
国産スタンダード	プランク	カラマツ

## シャウッド純国産材プレミアムモデル、誕生。

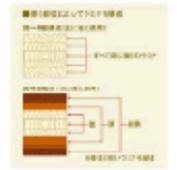


**国産材をつくる**  
シャウッドプレミアム構造材は、厳選した  
木を乾燥する工程で、材質・強度などの  
品質を徹底的に管理したシニアグレード  
材であり、強靭な木質特性で、記事が  
書かれたり、書き込みが可能なため、記事が  
あっても、書き込みが可能なため、記事が

のこだわり、一歩一歩、品質で実用である  
ために、世界中の木を厳選しています。  
国産と品質への思い、それは国産材・地域  
ブランドにも通じています。

**木の持つ機能を最大限に引き出す。**  
国産材は、つばきという強い木質特性を持つ  
ので、木材の内部に湿気や虫食いの  
被害に発生・発生せず、木の強い部分だけ  
を使います。また強度を高めるための乾燥  
処理も工場や乾燥場の設備・設備、  
十分な管理を必要に実施することが可能。  
自然の木ならではの  
気持よく、安心に  
ご利用いただけます。

乾燥機、UV処理や防虫剤の塗布など  
に比べて乾燥機処理、防虫剤の塗布、  
乾燥機は、一輪製材との乾燥機と乾燥機  
を組み合わせることで、乾燥機  
でも乾燥機は、乾燥機は、乾燥機  
により、乾燥機は、乾燥機は、乾燥機  
により、乾燥機は、乾燥機は、乾燥機



### ※1 「木材利用ポイント制度」の目的、概要

木材利用ポイント制度は、地域材の適切な利用により、森林の適正な整備・保全、地球温暖化防止及び循環型社会の形成に貢献し、農山漁村地域の進行に資することを目的としています。地域材を活用した木造住宅の新築等、内装・外装の木質化工事、木材製品等の購入の際に、最大30万ポイント(1ポイント1円相当)の木材利用ポイントを付与し、各地の農林水産品等と交換できる制度です。

## 「5本の樹」計画

## 「5本の樹」計画とは

「5本の樹」計画とは、当社独自の生態系に配慮した庭づくり・まちづくりの提案です。2014年度の樹木の植栽実績は81万本で、2001年の事業開始以降の植栽本数は累計1100万本となりました。

「5本の樹」計画とは、当社独自の生態系に配慮した庭づくり・まちづくりの提案です。

日本の国土の約4割を占める「里山」は、絶滅危惧種を含めた多種多様な生き物をそこで養うばかりでなく、野生動物の移動のための回廊の役目を果たし、生態系ネットワークを形成することによって、生物多様性の保全に重要な役割を担ってきました。そこでは住まいも人の暮らしも、生態系の一員でした。しかし近年では、急速な都市開発、化石燃料に頼った住まいづくり・ライフスタイルの変化などにもとない、都市近郊での「里山」が激減し、人間から「里山」へのアクションが減った結果、本来「里山」の持っていた生物多様性が損なわれつつあります。

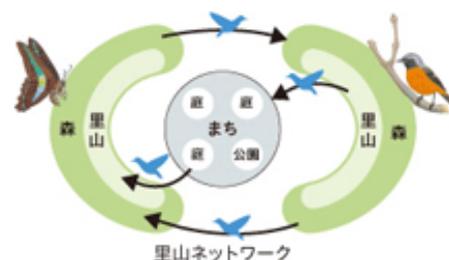
当社は、数多くの住宅を供給するハウスメーカーの責任として、住宅を通じた自然環境の保全に向け、『里山本来の姿』を手本に2001年から生物多様性に配慮した造園緑化事業「5本の樹」計画を進めています。住まいの庭に小さな「里山」をつくることで、地域の自然とつなぎ、失われつつある生態系ネットワークを維持・復活させようというのが狙いの一つです。

「5本の樹」計画には「3本は鳥のために、2本は蝶のために、日本の在来樹種を」との思いが込められています。

日本各地の気候風土に合った在来種の樹木をこだわって植栽することで、生き物など身近な自然と共生し、時とともに愛着が深まっていく庭づくりを目指しています。

2014年度の樹木の植栽実績は81万本で、2001年の事業開始以降の植栽本数は累計1100万本となりました。ここ2年ほど100万本を超える樹木を植栽してきましたが、昨年度は戸建住宅受注減の影響から、減少しました。

都市に、小規模でも庭や街路を設けると、野鳥や蝶などの生き物が訪れる場所になります。このような空間を少しでも多く設ければ、それらの生き物が移動する回廊となり、ネットワークを形成して生態系を保全し、生物多様性を豊かにします。こうした空間は、生き物にとって訪れやすい(利用しやすい)場所になるだけでなく、同時に住まい手も自然の豊かさを楽しむことができますようになります。



「5本の樹」による生態系ネットワーク

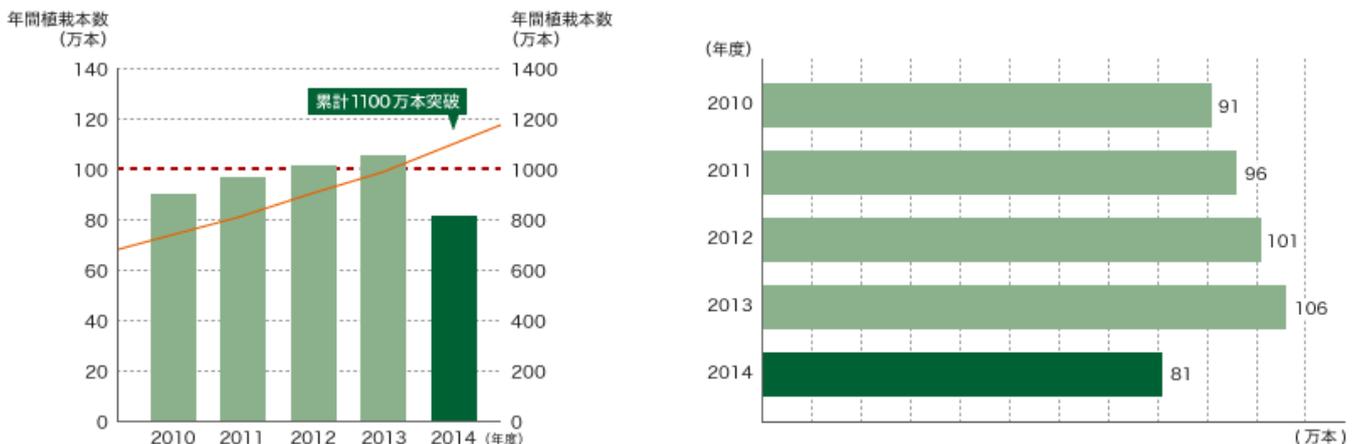
## 「5本の樹」計画の植栽例



緑量のバランスを考慮した「5本の樹」計画の庭は、生き物が息しやすい環境をつくるだけでなく、住まい手にも種々のメリットをもたらします。例えば、野鳥のえさ場となる実のなる落葉広葉樹は夏には緑陰によって強い陽射しを遮るだけでなく葉の蒸散作用で冷気を生み出し、冬は葉を落とした枝の間から暖かな日差しを住まいの中に取り入れて冷暖房エネルギーの削減に貢献してくれます。また、常緑樹は一年中緑の風景を保ち小さな野鳥たちが猛禽類などから身を隠す避難場所になりますが、そこに住まう人にとっては通りからの目隠しとなってくれます。また、最近では樹木や草花の癒しの効果も注目されるようになり、「5本の樹」計画の一つの成果として現れ始めています。

豊かに整備された緑化は、時間の経過とともに成長して住環境への愛着を育み、住まいやまちの資産価値を高め、「経年美化」を実現する重要な要素となっています。

## 年間植栽実績の推移



「5本の樹」計画

## 生物多様性活動に関する民間団体への参画

「企業と生物多様性イニシアティブ」に当社は創設メンバーとして関与し、生物多様性に関する取り組みの重要性を認識してきました。そのほか日本経団連等「生物多様性民間参画イニシアティブ」、「生物多様性民間参画パートナーシップ」へも参画しています。

### 「企業と生物多様性イニシアティブ(JBIB※)」への参画

生物多様性条約(CBD)では、生物多様性の保全と持続可能な利用の実現等、条約目的の実現について、民間部門の重要性が強調されています。「JBIB」は、2008年4月1日に、当社のほか、国内で生物多様性の保全および持続可能な利用に積極的に取り組む企業が集い、設立され、2012年6月には一般社団法人となりました。当社は創設メンバーとしてその創設に関与し、早くから生物多様性に関する取り組みの重要性を認識してきました。参加企業は2014年6月25日時点で正会員企業36社、ネットワーク会員企業19社にのぼり、企業が主体となって連携した活動が行われています。

生物多様性の保全に関する共同研究を実施し、その成果をもとに他の企業やステークホルダーとの対話を図ることで、生物多様性の保全に貢献するWG活動を展開しています。

2015年2月には、JBIBの会長をつとめる三井住友海上火災保険株式会社(社長:柄澤 康喜氏)主催の生物多様性に関するシンポジウム「企業が語るいきものがたりPart8」が開催され、JBIBが特別協力を行いました。

本シンポジウムは2007年から毎年開催されており、2015年は8回目となりました。

今回は、昨年10月に韓国のピョンチャンで開催されたCOP12(生物多様性条約第12回締約国会議)の成果と課題、愛知目標の達成状況を踏まえ、企業に期待される役割・行動について検討されました。また、分科会では企業の関心が高い3つのテーマ「企業緑地を活用した生物多様性保全」、「生物多様性に配慮した持続可能な原材料の利用」、「生物多様性から見た国土保全」をテーマに開催されました。

※ JBIB(Japan Business Initiative for Biodiversity)

#### 【関連項目】

> [「企業と生物多様性イニシアティブ\(JBIB\)」ホームページ](#)

### 日本経団連等「生物多様性民間参画イニシアティブ」、「生物多様性民間参画パートナーシップ」への参画

生物多様性条約第9回締約国会議(COP9)では、開催国ドイツ政府の主導で「ビジネスと生物多様性イニシアティブ(通称:B&Bイニシアティブ)」が提唱され、当社は日本企業9社のうち1社として、2008年に参画に署名しました。

その後、幅広い業種でさまざまな規模の事業者が生物多様性に関する取り組みに参画し、その裾野を拡大していくことが必要として、2010年5月25日、生物多様性の保全および持続可能な利用等、条約の実施に関する民間の参画を推進するプログラム「生物多様性民間参画イニシアティブ」が、10月にはその活動主体となる「生物多様性民間参画パートナーシップ」が設立されました。

これは、日本経済団体連合会、日本商工会議所および経済同友会等、経済界を中心とした自発的なプログラムとして、国際自然保護連合日本プロジェクトオフィス、農林水産省、経済産業省および環境省と協力されたもので、パートナーシップ参加事業者会員は2015年4月時点で445事業者、21経済団体、NGO・研究者会員28、公会員15に及び、当社もこれに加盟しています。

「5本の樹」計画

## 緑豊かな賃貸住宅「シャームゾン ガーデنز」

「5本の樹」計画の考え方を賃貸住宅のエクステリア提案でも生かしています。「シャームゾン ガーデنز」と名付けている賃貸住宅では、「5つの環境プレミアム」を新たな指標とし、建物とともに敷地、周辺環境も含め良好な住環境を創造しています。

### 「5本の樹」計画の考え方を生かし 賃貸住宅の質を向上

当社は、「5本の樹」計画の考え方を、賃貸住宅のエクステリア提案でも生かしています。特に、「シャームゾン ガーデنز」と名付けている賃貸住宅では、植栽計画は重要な意味を持ちます。

当社は、まちや自然、暮らす人の観点から敷地環境を高める「5つの環境プレミアム」(①街並みとの調和 ②自然環境の保存と再生 ③環境負荷への配慮 ④快適性を高める設計 ⑤安心・安全をもたらす設計)を新たな指標とし、それぞれの項目に当社独自の厳しい評価基準を設け、数字で見える化し建物とともに敷地、周辺環境も含め良好な住環境を創造しています。このような優良な環境の物件は、入居者にとっての住環境を向上させるばかりでなく、オーナー様にとっても空室率や賃料の下落を抑え資産価値を向上させることになり、将来まで選ばれ続ける賃貸住宅になります。



Sha Maison Gardens



## 周辺環境との調和を図り、「まちの財産」にする

「シャーマゾン」の計画地でも周辺環境との調和がまちなみの美しさに影響します。敷地全体で建物と調和する緑豊かな共有空間をデザインするとともに、歴史ある既存樹や、「経年美化」を実現する素材の利用を推進するなど、その土地と周辺環境の魅力を最大限に引き出す外構とし、建物と相まって魅力を高めることで、地域に溶け込む「まちの財産」をつくります。



既存の雑木林を生かし計画された、緑あふれるシャーマゾン。



やむなく伐採した既存樹(ムクノキ)を使用した共用廊下のベンチ

## 緑化率を高め、環境価値の向上と緑を通じたコミュニティを育てる

入居者にとっても、緑豊かな環境は心地よく暮らすための大切な要素のひとつです。入居者同士の自然な交流をはぐくむことができる緑に配慮し、緑化率10%以上を目標に、経年美化につながる緑の環境づくりを提案しています。近隣の人々とのふれあいを生むようなCOMMONスペースなどをそれぞれの敷地に合わせて計画。コミュニティづくりにも役立っています。また、建物は住棟間の距離や窓の配置などに工夫し、樹木も生かして外部からの視線を自然に遮ることができるよう、プライバシーにも配慮します。植栽する樹木はもちろん「5本の樹」を中心とし、生物多様性に配慮した計画を心がけています。



コミュニティを育む緑豊かな「COMMONスペース」

## 「プラチナ ガーデنز」を新たに創設

賃貸住宅を対象としていた「シャーマゾン ガーデنز」に、サービス付き高齢者向け賃貸住宅・有料老人ホーム・グループホームなど的高齢者向けプラチナ物件を加え、「プラチナ ガーデنز」として展開を始めました。

シャーマゾン ガーデنزの評価基準を踏襲しつつ、④快適性を高める設計 ⑤安全・安心をもたらす設計 の項目にプラチナ事業ならではの基準として高齢者や運営スタッフの視点が盛り込まれています。

## 「5本の樹」計画

## 分譲マンションにおける緑化の推進

緑被率の高さは、「5本の樹」計画とともに積水ハウスの分譲マンション「グランドメゾン」の大きな特徴として評価されています。2014年度の緑被率は平均約18%でした。

従来のまちづくりでは、マンションは地の利と利便性が最大のポイントで、植栽などの緑化はむしろ計画コストや管理費に影響を与えるものとして敬遠され、エントランス部などに外来種の常緑樹中心に最低限の植栽が施工されることも少なくありませんでした。

積水ハウスでは、2001年に戸建住宅や大規模分譲地から「5本の樹」計画に基づく緑化を開始しました。緑化がまちと建物の価値を高め、住まい手にとっても快適性を高め魅力をアップする重要な要素であることを全社で共有し、分譲マンション事業においても緑化を推進し、緑被率20%を目標として事業を推進しています。

こうした取り組みの結果、緑被率の高さは「5本の樹」計画とともに積水ハウスの分譲マンション「グランドメゾン」の大きな特徴として評価されています。2014年度竣工19棟の緑被率は平均で約18%（総敷地面積2万3741m<sup>2</sup>、総緑地面積4213m<sup>2</sup>）でした。

共同住宅であるからこそ、共有部の豊かな緑は入居者の心を癒し、住民同士のふれあいの場としても、その付加価値を高める重要な意味を持つと考えています。

## グランドメゾン宮崎台（川崎市高津区）

東急田園都市線「宮崎台」駅から徒歩約6分。「渋谷」をはじめとする都心の主要エリアへのアクセスが良好であるにもかかわらず、都市の喧騒から離れた緑あふれる田園都市に「グランドメゾン宮崎台」は誕生しました。

建築前に元々あった建物には植栽が全く施されていませんでしたが、前面道路には従前から非常に美しいたざまのけやき並木があり、この価値を生かした計画にしています。

けやきの木漏れ日が差し込むエントランスを含む緑あふれるファサードは、入居者のみならず通行する人々にけやき並木とは異なる新たな街路景観を提供しています。これから年を重ねますスタイルを増す石積みや植栽は、「5本の樹」計画の思想のもと、在来種中心にプランニングされ、愛着の深まる「街の財産」として醸成されていきます。



決して広いとは言えないスペースを緑化したファサード（2015年4月撮影）



ケヤキ並木以外に緑が施されていない建築前の写真



歩行者にケヤキ以上の緑を提供するエントランス付近

【敷地面積 1,830m<sup>2</sup>、緑化面積367m<sup>2</sup>、緑被率20%、2014年11月竣工】

## グランドメゾン京都岡崎(京都市左京区)

「グランドメゾン京都岡崎」は東山の山並みを間近に見ることができる場所に位置し、西には平安神宮・岡崎公園、東には南禅寺、南に京都市動物園、琵琶湖疏水を挟んで無隣庵、と緑あふれる観光名所に囲まれたロケーションです。

道路に直面した建物が多い京都のマンションにあって、建物を敷地の奥に配置。エントランスゲートからエントランスまでの経路を長くとることにより、前面道路の騒々しさを緩和するとともに、邸宅としての品格を印象付けるように計画しています。

風格のあるエントランスゲートをくぐると、15mを超える既存のアカマツやヤマモミジなど、季節を感じさせる植栽を施しています。和の趣を感じさせる既存の手水鉢・灯籠などを用いて、風情豊かな造園を設えています。また、多く使われている白い砂利は、昔、地元で産した白河砂利と同等品を使い京都の寺社で見られる、枯山水を再現しています。

植栽計画は「5本の樹」計画に基づく在来種を中心とした配植をし、「経年美化」のまちづくりに努めています。



竣工時全景写真  
～シンボルツリーは既存のアカマツ～



白川砂利や五郎太石を使い白川の支流をイメージした枯山水



建物側からエントランスゲート付近を眺む

【敷地面積 2410.46m<sup>2</sup>、緑化面積 649.83m<sup>2</sup>、緑被率27%、2015年1月竣工】

## 「5本の樹」計画

## 「5本の樹」いきもの調査

「5本の樹」いきもの調査は、専門家との協働で2008年9月から実施しているもので、「5本の樹」計画の効果を検証しています。2014年度は、2カ所の当社分譲地と本社のある新梅田シティで実施しました。

「5本の樹」いきもの調査は、専門家との協働で2008年9月から実施しているもので、「5本の樹」計画のまちづくりの前後で、生き物の数を調査し、周辺環境との違いや、経年による変化を記録し、その効果を検証することを目的としています。

2014年度は、2013年に続き、福岡県の大規模な埋め立て人工島にある「福岡アイランドシティ」と茨城県つくばみらい市にある「スマートコモンステージみらい平」の2カ所の当社分譲地と本社のある新梅田シティで調査を実施しました。

「福岡アイランドシティ」では、2005年から複数の街区ごとに順次分譲を開始した当社分譲エリアと中央公園エリアで調査を継続していますが、2014年3月の鳥類を中心とした調査では7目17科28種（昨年度：10目20科24種）が確認されました。分譲地エリアでは、スズメやハクセキレイなどの「都市鳥」が多く、これに冬鳥であるシロハラやジョウビタキ、ツグミが加わっていました。これらは冬季における市街地の鳥類相の典型であり、埋め立てによる分譲地であっても、適切な植栽樹種の選択と街区デザインにより、周辺地域の生態系が着実に根付いていると評価できます。その他、希少種としては、ミサゴ、ハイタカ、ノスリが確認されましたが、いずれも一時的な飛来や上空通過であると考えられます。

「5本の樹」計画との関係では、ヒヨドリがクロガネモチとセンダンの実を、ジョウビタキがマサキとハクサンボクの実を食べているのが確認できました。

分譲地エリア全体における鳥類の確認種数を2年前の調査と比較すると、9種から17種と、倍に近い種類にまで増えていました。2年前にはほとんど確認できなかったヒヨドリ、シロハラ、メジロ、ムクドリ、ツグミの5種が2014年には確認できました。これらの鳥は、定着に時間のかかる種と考えられます。スズメは4カ所から7カ所、キジバトとジョウビタキは4カ所から6カ所と増加。一方で、シジュウカラは、確認箇所は6カ所から変化なく、早くから定着していたことがうかがえます。

アイランドシティ全体に生息する鳥類種数に大きな変化はないにもかかわらず、分譲地エリアでは2年前と比較して種類が増加していることがわかりました。具体的には、ヒヨドリやムクドリと言った留鳥や、シロハラやツグミといった冬鳥が確認されるようになっており、2年の間に分譲地エリアの環境収容力が向上していると考えられます。

確認種数の増加がうかがえた一方で各調査地区での個体数については少ない印象でした。これについては、各戸建住宅の庭の樹木の生長や、街区の境界などに設置された公園内の樹木がさらに生長し、緑量が増加していくことで個体数も増えていく可能性があります。

今後、公園などに巣箱を設置することで、営巣環境を人為的に提供することも検討していきます。

■ 2012年および2014年における福岡アイランドシティ鳥類調査結果の一覧(冬期)

目名	科名	No.	種名	① — 1 戸 建		② — 2 集 合		③ — 3 集 合		④ — 5 戸 建		⑤ 二 — 1 集 合		⑥ 二 — 3 戸 建		⑦ 二 — 4 戸 建		⑧ 中 央 公 園		備考	
				12	14	12	14	12	14	12	14	12	14	12	14	12	14	12	14		
カ モ	カモ	1	オカヨシガモ															●	●		
		2	ヒドリガモ																●	●	
		3	マガモ																●	●	
		4	カルガモ																●	●	
		5	オナガガモ																●		
		6	コガモ																●		
		7	キンクロハジロ																●		
カ イ ツ ブ リ	カイツブリ	8	カイツブリ															●	●		
ハ ト	ハト	9	キジバト	●	●			●	●	●	●		●		●	●	●	●	●		
		10	ドバト												●				●	●	外来種
ペ リ カ ン	サギ	11	アオサギ															●	●		
ツ ル	クイナ	12	オオバン															●	●		
タ カ	タカ	13	ミサゴ					●										●		国RL:NT	
		14	トビ															●	●		
		15	ハイタカ																●		国RL:NT
		16	ノスリ				●		●										●		県RDB:NT



「5本の樹」計画

「庭木セレクトブック」と「5本の樹・野鳥ケータイ図鑑」

樹木やその樹木に集まる鳥や蝶についての情報を入手できる「5本の樹・野鳥ケータイ図鑑」サイトの公開をするとともに、この普及に努めています。スマートフォン版でより活用しやすい環境となり、2014年度は年間約9万件の利用がありました。

当社は、2001年から「里山」に学ぶ庭づくりをテーマにして「5本の樹」計画をスタート。住宅の庭先からの生態系保全活動に取り組んでいます。

「5本の樹」計画のバイブルといえる庭木図鑑「庭木セレクトブック」。樹木のみならず、花や実を求めて集まる蝶や花を紹介する庭木の資料として、2001年の発刊以来、お客様との外構の打合せの際にも使用しており、「5本の樹」計画に関心を持っていただくコンテンツとして好評です。改訂を重ねるなか、2013年は「庭木セレクトブック」からモバイル端末を用いて見ることのできる映像コンテンツを盛り込み、大幅にリニューアル。2年目となる2014年度の年間利用冊数は8500冊となりました。

また、携帯電話から樹木やその樹木に集まる鳥や蝶の情報が入手できる「5本の樹・野鳥ケータイ図鑑」サイトを開発・公開し、多くの方に身近な鳥や蝶にもっと親しんでもらい、自然保護や環境意識の向上を図っています。

本物の鳥の鳴き声と写真が確認できるため、いわば「携帯版ポケット自然観察図鑑」として利用が広がってきています。2014年2月にはスマートフォン版を公開。画像が見やすくなり、さらに活用しやすくなりました。2014年度は、1日平均250人近くの方にご利用いただき、年間利用件数は約9万件でした。

「5本の樹・野鳥ケータイ図鑑」サイトを運営

鳥や蝶、樹木の名前を知らなくても形や大きさ、色の特徴から検索可能。鳥は鳴き声を再生して確認することができます。

- 鳥24種 (鳴き声も)
- 蝶24種
- 樹木92種

を掲載

■ サイトトップページからアクセス <http://5honnoki.jp>

■ QRコードからアクセス

## 「5本の樹」計画

## 「緑の都市賞」を受賞した「新・里山」・「希望の壁」

「5本の樹」計画に基づき大阪駅にほど近い当社本社ビル所在の「新梅田シティ」に「新・里山」が2006年にオープンしました。以降、市民やオフィスワーカーが身近な自然を感じる場として親しまれています。2014年11月「希望の壁」とともに(公財)都市緑化機構主催第34回「緑の都市賞」内閣総理大臣賞を民間企業で初めて受賞しました。

## 「5本の樹」計画の実践の場「新・里山」

積水ハウス本社所在の「新梅田シティ」は、「梅田スカイビル」(40階、173m)を中心とした大阪の代表的なランドマークで注目のエリアとされています。オフィスなどが入居する連結超高層ビルは、英紙「タイムズ」に「世界を代表とするトップ20の建物」として掲載され、国内外から多くの観光客が来訪。約3分の1を占める外国人観光客も「新・里山」「希望の壁」を楽しまれています。

「新・里山」は、当社「5本の樹」計画の考え方にもとづき、雑木林や竹林、棚田、野菜畑、茶畑などを配し、失われつつある日本の原風景「里山」を都心部に再現した「新梅田シティ」の一角を占める自然豊かな約8000m<sup>2</sup>のエリア。地域の在来種を中心に植栽することで、地域に生息する生き物の多様性にも配慮した空間です。



2008年11月「ハイタカ」が飛来  
生態系ピラミッドの頂点に位置するタカが飛来



2013年10月 絶滅危惧種「ミゾゴイ」が飛来  
約1か月滞在。農業不使用によりエサとなるミズなどが豊富

2006年7月に「新・里山」がオープンして以来、多様な植物、鳥や蝶など多くの生き物を育み、生態系や生物多様性を感じることもできる場として市民やオフィスワーカーに親しまれてきました。また、田植え等のイベントを通じた地域の小学校、幼稚園等の教育の場として、オフィスワーカーの農作業ボランティア活動などにより、日常的に親しまれる地域密着型のコミュニティの場として愛されてきました。2008年には「ハイタカ」が飛来。2013年には絶滅危惧種である「ミゾゴイ」が約1か月滞在しました。専属のガーデニング会社が、自然に負荷の少ない有機栽培管理による循環型の管理に努め、生き物を育む場を管理しています。

「新・里山」と隣接した「希望の壁」は、一連のコミュニティ活動、空間管理、マネジメント等が評価され、2014年11月、は公益財団法人都市緑化機構が主催する第34回「緑の都市賞」事業活動部門にて最上位の内閣総理大臣賞を民間企業として初めて受賞しました。

## 「新・里山」の四季折々



春



夏



秋



冬

## 緑化モニュメント「希望の壁」

「希望の壁」は、建築家 安藤忠雄氏の発案により当社が建設し、2013年11月に完成しました。「新・里山」に隣接する高さ9m・長さ78m・奥行3mの巨大な緑化モニュメントです。

壁の側面は、当社「5本の樹」計画での選定樹種であるソゴ、クチナシ、ヒラドツツジ、ヤブツバキ、ヤマブキ、フジ、オオイタビなどを中心に約100種類2万本以上の多彩な植物で覆われ、開花時期の異なる草木の計画的配置により、四季に応じて変化する表情を楽しめるよう計画しています。

また、蝶を招く花木も混植することにより、「新・里山」の「バタフライ・ガーデン」ともつながる「バタフライ・ウォール」を目指し、蝶の専門家とも情報交換を行っています。



「希望の壁」と「梅田スカイビル」



## ■ 受賞歴

2008年「第2回キッズデザイン賞」(「新・里山」空間を使った地元の子どもたちへの環境教育活動)

主催: 特定非営利活動法人キッズデザイン協議会

2009年「一村一品知恵の環大作戦」全国大会 銅賞受賞

主催: 環境省 ストップ温暖化

2010年 第7回「企業フィランソロピー大賞」特別賞

主催: 公益社団法人日本フィランソロピー協会

2010年「生物多様性保全につながる企業のみどり100選」

主催: 財団法人都市緑化機構

2013年「第7回キッズデザイン賞」受賞(「5本の樹」計画を活用した全国での自然教育活動)

主催: 特定非営利活動法人キッズデザイン協議会

2014年 第34回「緑の都市賞」内閣総理大臣賞受賞

主催: 財団法人都市緑化機構

### 【関連項目】

- > [公開HP>生物多様性の取り組み](#)
- > [各地で“学びの場”を提供し、展開する教育貢献活動](#)